

小国町法末の地すべり調査（2004年10月29日）

稲葉一成（大学院自然科学研究科），早川嘉一（農学部），福山利範（農学部）

小国沢川を遡って法末地区へ至る県道大沢・小国・小千谷線では，盛土の区間がことごとく崩壊した（写真 - 1）。法末地区内では，小国沢川の上流部では，大規模な崩壊が発生し，県道が被災した（写真 - 2）。住民の話では，余震の度に崩壊範囲は背後へと拡大しているとのことである。崩壊地頭部の背後には，約15m程度離れて民家があるため，早急な対策が必要である。法末地区の最上部に位置する道見峠付近をはじめ，地区内の各所において，南北方向に走る多数の亀裂を確認した（写真 - 3）。特に，集落内から愛宕神社祠へ至る尾根においては亀裂や小崩落が顕著であり（写真 - 4，写真 - 5），それらは頂上の愛宕神社まで続いている（写真 - 6）。頂上部では，祠の北西方向への移動（約1.5m），狛犬などの倒壊（写真 - 6）などが見られ，震動の激しさが窺える。

なお，法末地区は，「法末」，「愛宕祠」の地すべり防止区域に指定されており，これらは，かつて移動したであろう大規模地すべりのエリアとも重なる。危険が迫っている箇所への早急な対応はもちろんだが，地震による大規模地すべりの再活動ということも念頭においた調査も今後は必要となろう。

文責：稲葉一成



写真 - 1



写真 - 2



写真 - 3



写真 - 4



写真 - 5



写真 - 6